

沖縄を語る

座谈会

出席者（敬称略）

幸(本部) 男(官浦)
立 猿 今 井 阿 古 山 渡 村 手 津 賀
壽 宗 俊 正 正 光 次 升(港務)
司 會 一 游 田 書 記 次 長

首を切る前に返せ沖繩
守れ平和の此有策く全

三池労組は去月沖縄の那覇で開催された「安保条約廃棄、基地撤去、沖縄の全面的無条件返還をめざす国民大会」（二月十三日一同十五日）に、六人の仲間を代表として派遣しました。代表は別項の六人でしたが、代表たちは本大会のほか、「違憲訴訟について」「安保・基地撤去について」「一本化政策に反対し、民主的権利の確保について」「全軍労闘の闘いの支援を中心とする本土と沖縄の連帯強化について」以上四つの分科会に参加、そのあと現地同胞と直接交渉を深めるなどの努力を重ねて帰りました。

さて大人の代表たちは沖縄で果して何を見、何を聞き、何を感じ、そしてどうか。編集部はこのほど代表たちに集ってもらって、語り合ってもらいました。ここにそのままお伝えすることとします。

重たといふわけでしよう
古賀 同じ日本人
地へゆくのに、いちいち

て、総面積が七億三千二百万坪。ほぼ佐賀県くらいの大きさです。人口が約三百万。なにしろ陸地の一三一・七パーセントに当たる九千二百万坪が、軍

民主主義と平和を口にする国の軍隊が、ことあるごとに銃剣つきつけての弾圧。許すことができようか。

アメリカ四軍の首切り合理化攻撃粉碎のため闘う全軍労機閨紙

で、軍人兵士の五万四千人、家族を含めれば二万人が実に悠々と住んでいるわけで、とにかく、どいもんです。

日本人が日本の領土にゆくのに……

司 余 ところで、そのような沖縄に渡るときの鹿児島出発の様子は?

猿 渡 あとで聞違いじゃつたということ下さいわい向こうに渡ることこそでけたもの。鹿児島についたら私にだけ「お前には渡航許可がぢりてしない」ということだったでしようが。だれが許可をおさんのかといえば、それはアメリカ

A black and white photograph showing a group of soldiers in a rugged, outdoor setting. One soldier in the foreground is holding a rifle and looking towards the left. The background shows a town or city with numerous buildings.

古賀 同じ日本人が、同じ日本の一つの土地にのぐのに、いちいちアメリカ軍の許可が必要な、というのですからな。

猿渡 まだ渡りもしないでから、アメリカの沖縄支配の不当さをひしひを感じました。

司会 こんどの交流に対する参加者数は
阿久津 四百五人。だが実際に鹿児島にや

司会 戰場といふは、南部の戦蹟といふ

いはまた見せつけられる人種的・民族的な差配の実態があり、うちとしては、組合が沖縄を表をおくるうとなれば、組合員が一生懸命カンをしてくれた——この力こそ、何よりも尊い財だとしごとを、向こうに書いてからしみじみいました。この財産を大切に守つてゆかなければなりません。

吉田茂が書いた「黎明」

繩に着く前から戦争の悲惨さを思われるを得ませんでした。「この辺が、戦艦“大和”が沈んでいたところ」「この辺りだ。日本の特攻機がアメリカの軍艦めがけてつっこんで、自爆して果てたところ」など、あの人たちほ口ぐせ語り合っておられたのですが。

のにヤシの木らしい木すらない。
阿久津 あがって見ると、なるほどそこか
ここにあわらも三あわらもある木の根株があるが
みんな焼けてしまつたものばかり。

阿久津 例の「ひめゆりの塔」や、「健児の塔」を見ました。そこで私がまず感じたことは、「沖縄を忘れちゃならぬ」「真珠湾を忘れちゃやならぬ」ということだつたのですね。沖縄の同胞を死地に追いやつたのは日本の軍部ですが、それはまたそれを許したわれわれ国民の責任でもあるんだから。もとと要塞なんかにはとてもなれないはずのあの平らな島々が、たたひとり、アメリカ軍を本土に上げないためにだけ、恐るべき決戦場にかえってしまった。

南部の戦蹟のあるところに「黎明之塔」という碑が立っていたが、その字はなんと沖縄を売った男一吉田茂が書いたと聞いたとき私は、「これはいつたい何たることか」と、ハラの中が煮えくり返つたですよ。

井手　戦争は敵を殺すと同時に味方も殺す。日本の将来を決定する子弟の教育で重大責任を負っている先生たちが、軍国主義につながる教

を負つてゐる先生たちに、軍國主義につながる教（次ページ上段へ続く）